

# 水稻新品種「中部138号」の特性と良食味栽培に向けた取組

～病気に強い“新しい「ミネアサヒ」”を栽培技術でさらにおいしく～

吉田 朋史（農業総合試験場山間農業研究所）

【令和元年11月28日掲載】

## 【要約】

「ミネアサヒ」にいもち病とイネ縞葉枯病の抵抗性を付与した「中部138号」の生産が2021年度から開始される計画で、これまでの「ミネアサヒ」栽培地域で全面切り替えとなる。この品種切り替えの機会にさらなるブランド力向上を目指すため、良食味栽培技術の確立に向けて試験に取り組んでいく。

## 1 はじめに

愛知県農業総合試験場が2017年3月に品種登録出願した水稻新品種「中部138号」は、「ミネアサヒ」にいもち病とイネ縞葉枯病の抵抗性を付与した品種である。愛知県の奨励品種に採用され、2021年産から従来の「ミネアサヒ」から全面切り替えをして、新しい「ミネアサヒ」として栽培される計画である。

これまで「ミネアサヒ」は、その食味の良さから山間地域のブランド米として長くその地位を確立してきた。しかし、一般社団法人日本穀物検定協会が実施する米の食味ランキングにおいて、特A評価を受けたことはない。そこで、新しい品種に切り替わるこの機会に栽培法を見直し、「中部138号」を従来のミネアサヒよりさらにおいしくできる良食味栽培技術の開発に取り組んでいる。

## 2 「中部138号」について

### (1) 基本特性

「中部138号」は、病害抵抗性以外の特性は全て従来の「ミネアサヒ」と同等であり（写真1）、食味についても遺伝的な特性としては同等である。

### (2) 普及を図る地域

「中部138号」の特性は、病害抵抗性以外は「ミネアサヒ」と同等であることから、耐暑性は備えていない。従って、「ミネアサヒ」のブランド力を強化していくためにも、「中部138号」は、高温不稔や白未熟粒の発生の恐れがある平坦地域での栽培はせず、これまでの「ミネアサヒ」栽培地域での普及を進める。

### (3) 栽培上の注意点

これまでの「ミネアサヒ」では、多肥栽培をして多収を狙うことはいもち病発生リスクを高めることにつながるため、必然的に多肥栽培が行われなかったが、「中部138号」においても多肥栽培は食味を落とす可能性があるため、絶対に行わない。

## 3 「中部138号」の良食味栽培に向けた取組

### (1) 収量とタンパク質含有率の関係

2015年から2019年の5年間、奨励品種決定現地調査を岡崎市、豊田市、新城市で実施した。この調査は、産地の慣行的な栽培方法で、収量や品質などを確認するものである。

2018年までの4年間の「ミネアサヒ」及び「中部138号」の精玄米重と、タンパク質含有率との関係を図に示した。



写真 成熟期の草姿  
(左「中部138号」、右「ミネアサヒ」)

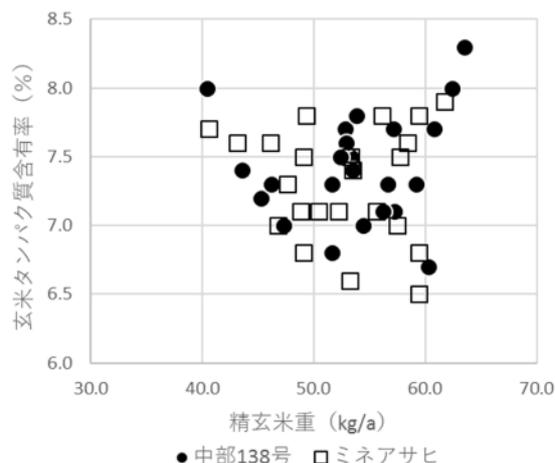


図 精玄米重と玄米タンパク質含有率との関係  
(タンパク質含有率は乾物換算値)

精玄米重は 40.4kg/a から 63.5kg/a、玄米タンパク質含有率は 6.5% から 8.3% の範囲に両品種ともに分布した。2品種の分布の傾向には明瞭な差はなく、また、精玄米重と玄米タンパク質含有率との関係も傾向は見られなかった。

2品種どちらにおいても食味に影響するタンパク質含有率のばらつきは大きく、精玄米重が 50~60kg/a の範囲で見ると、タンパク質含有率は 7.0 以下から 8.0 近いものまであった。このことから、収量を安定させた上でのタンパク質含有率の制御が栽培面の課題として残っていることがうかがえた。

## (2) 今後の取組内容

産地の栽培暦等に施肥量の指標はあるものの、その数字に幅があり、生産者によって施肥内容やその量が異なることが、タンパク質含有量にばらつきが大きい原因と考えられる。

今後は良食味栽培に狙いを定め、①窒素施肥を抑える②登熟を向上させる、の二つの観点から、最適な施肥内容及び量、管理方法を検討する。地力を考慮した施肥量の決定などの技術について検討し、タンパク質含有量のばらつきを制御して特Aを取得できる良食味栽培技術の確立を目指していく。